

一九三〇年以來小麥の世界的過剰が及ぼした結果とか、日本の絹糸の生産過剰の及ぼした結果などを併せ考へる時に、我等は史記の論説の中に今も猶新しいものゝ多いことを感じる、以上を以て司馬遷の人文地理學の見識といふものゝ大略を紹介し得たと考へるから之を以て擱筆する。

佐賀縣の自然地理

堀 米 次

第一節 地形概観

佐賀縣の中央から稍北によつて聳え立つ筑紫山脈中の秀峰たる天山(海拔約一〇五〇米)に登つて一日の眺望を恣にする時、其處に展開される視界は實に本縣の最も主體をなす大部分である。東北遙かに背振山(一〇五五米)の靈山を望み、其間、北及び東部は主に花崗岩よりなる波浪形の山々が連互して本縣に於ける代表的山地を形成してゐる。天山の西なる視野には小巒起伏、丘陵に續くに丘陵を以てし、山林と水田或は畑地の交錯せるあり、此の一帯は概ね第三紀

層より成るのであるが、此單調を破るに處々に火山岩の噴出あり、それは自づと人文地理にも影響して複雑なる景觀を形成してゐる。眼を一度南方に轉ずれば、一望十里水田に續くに水田を以つてし、地表全く起伏なく、實に本縣の經濟活動資源の最も豊富なる地域を構成してゐるこの廣袤たる綠野の南に盡さるところ、有明の海あり。それを隔てゝ多良岳火山が聳えてゐるこれは楕圓形の舊噴火口を中心にホート型の美事なる火山地形を呈して、其裾野の遠く傾くあたり、本縣に於ける南部山地帶を構成してゐる

る。本縣西北部には玄海に面して長汀山浦、極めて出入多き東松浦半島を中心に、東に續いては圓弧狀の唐津灣、西南には喇叭管型に陥没せる伊萬里灣を抱いてゐる。そして其の間、極めて出入多き美事な沈降海岸を形成してゐる。これに反して有明海は南方から本縣の低原部に奥深く弧狀をなして灣入し、極めて單純なる沖積地海岸をなし、年々河川による沖積地の建設と、人工による干拓事業の進捗につれて、次第に海域を縮められつゝある。

廣袤東西一八、三五里、南北一八、二九里、面積一五八、四三方里を占めてゐる本縣は、我國一道三府四十三縣の中、面積の順位は四十二番目で沖繩縣の上位、鳥取縣の次位にある。

地形も大體低く海拔一千米を超すは僅かに背振山、多良岳及び天山の三山に過ぎない。今地形の概觀をなすに便宜上、假に海水面が二〇米を上昇せりとせば、本縣の地積は現在より約半減されるであらう。即ち佐賀平野の全部は海面

下に姿を沒して其海岸線は小城郡小城町から佐賀郡川上村都渡城にて小灣入を作り、更に東して神崎郡仁比山村に灣入を形成して東は鳥栖町に至る一線となる。又西部の灣入としては、現在の多久町、武雄町等は最も灣奥に位する港と化し、同じく鹿島町も外海に面する港となるであらう。而して其前方の杵島山地壘は南北に細長き島を形成して、鬼鼻山は東に突出する大半島となるであらう。次に假に水面が約百米上昇せりと假定する場合に示す本縣の海岸線は、現在の伊萬里灣と大村灣との連絡は固より（約七〇米上昇することによつて其水路は連絡す）、又有明海と唐津灣とも笹原峠にて連絡し、其處を自由に舟行し得るに到るであらう。そして杵島郡、東松浦郡地方は縱横無盡に交錯せる水路によつて切斷され所謂多島海を現出するに到る。

複雑なる自然狀態は、錯雜せる人文景觀を形づくるものである。以上の如き本縣の自然が人文の狀態に於ても自づと複雑なることは當然で

ある。然し本稿に於ては其人文地理的方向のことは、しばらく之を擱き、先づ本縣の自然地理的方向から研究しやう。

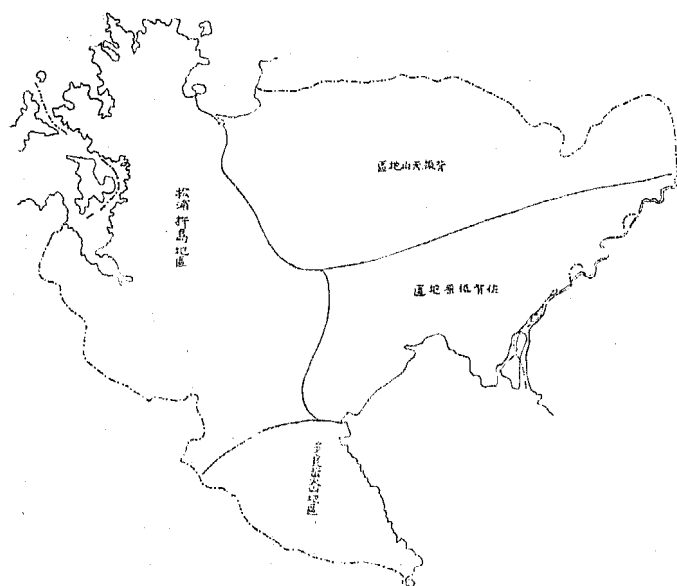
第二節 地 理 區

扨て本縣を地理的に考察すれば、次の四單元に分つことが出来る。

- (一) 背振、天山地區
- (二) 松浦、杵島地區
- (三) 多良岳地區
- (四) 佐賀低原地區

これらの區分は地理區として考ふる時には、佐賀縣の縣境を越えて、隣縣の一部とも密接不離の關係を有するところの存することは勿論である。例へば松浦地區の如きは、當然に長崎縣の北部地方と同區に屬すべきものであり、多良岳地區も長崎縣側の多良岳斜面を包含するものである。又、佐賀低原地區は福岡縣側をも含むところの筑後川下流域域の一部として共に研究さるべきものであらう。されど本論文に於ては縣

縣を地方行政の一區劃として、又郷土の一單位として其地理を研究せんとするものなるが故に



便宜上、本縣内のみを切離して其考察の中心點たらしめ、これを上述の四地理區として掲げたのである。

これを略圖に示せば前の如し。

上述の四地理區は、其地形的考察に於ても、或は地質及び地帶構造に於ても、大體明瞭なる四區を構成してゐるのである。

即ち上述の四地理區は之を地形的には

- (一) 北部隆起准平原地帶
- (二) 西部丘陵群地帶
- (三) 南部火山錐地帶
- (四) 東部平原地帶

となるのであつて第一圖の四地理區の一、二、三、四の各々に該當するのである。

又、本縣を地帶構造上から考察する時は

- (一) 北部斜構造地域
- (二) 西部縱構造地域
- (三) 南部放射狀谷群地域
- (四) 東部平原地域

となり前掲の一、二、三、四の各項に各々該當する。

更に又地質上より之をながむれば、

- (一) 北部花崗岩地帶
- (二) 西部第三紀層地帶
- (三) 南部新火山岩地帶
- (四) 東部沖積層地帶

と分つことが出來てこれも前に掲げたる一、二、三、四の各々に該當するのである。唯此處で一言したきは四區分の際に東西南北なる方位は便宜上用ひたるものであつて、決して嚴密なる方位の指示ではない。

右の如く單に自然狀態に於ても極めて顯著なる相異を示す本縣は、人文地理的にも亦各々特異點を有するものである。

次に四地理區の各々について其自然狀態を記載してみやう。

第三節 背振—天山地區

隆起准平原地帶

斜構造地帶

花崗岩地域

區域

本區は本縣の中北部を構成せる筑紫山脈の東部の大半を占むる不等邊三角形をなす一大山塊の地域である。

其範圍は北部に於ては佐賀縣境を越えて福岡縣石堂川線に至つてゐる。而して其北麓の山麓線は（海拔百米）糸島郡深江町から筑紫郡二日市町をつなぐ東西線によつて區切られてゐる。その中たゞ那珂川の谷が本地域の東部に、北から南に深く喰ひ込み、單調なる北麓地帶を鍵形に曲折せしめてゐる。

而して本區の西域は佐賀縣中部を北流して唐津灣に注ぐ松浦川の下流竝に其支流たる嚴木川の斷層谷によつて劃されてゐる。そして其の西には松浦、杵島地區に續いてゐる。又本區の東域は、不等邊三角形をなせる本地區の銳角部を以つて福岡縣に通り、遂に二日市附近に於て幅

七軒前後の斷層陷沒部を隔て、福岡縣の寶滿山々麓線に續いてゐる。此地區の南縁は殆んど東西に近き（事實は東イ北）一線を劃して佐賀低原地區に續いてゐる。

地形

此の不等邊三角形をなせる本地區は、地形的にも老年期の地貌を呈し、其多くは海拔五〇〇米内外の波浪狀の峰をなして隆起伏をなしてゐる。従つて高い山は甚だ少なく、千米を超すものは僅かに背振山（一〇五五米）及び、天山（一〇四六、二米）の二峰に過ぎない。然し低山性の山とは言へ、背振山の如きは本縣第一の高峰たるのみならず、筑紫山脈隨一の山であつて、山を愛好する縣人士の登山熱をそゝるものである。

而して此地區が他の三つの地區と大いに異るところは直接に海岸に接する所が甚だ少いことである。それは玄海に面して僅かに入舩の海岸線を所有するに過ぎない。即ち唐津町滿島以東であつて其の中、濱崎町に至る東西六軒の間は

全く沖積層のみより成り、美事なる弧狀の沙濱である。此處を虹の松原と稱して無數の老松が防風林として植ゑられ、長さ星霜の間に、玄海から吹きよする海風によつて樹相は特異となり、今や天下の三大松原の一として三保や舞子と共に讃へられてゐる。濱崎町から北二軒、福岡縣境の包石に至る間の背振地壘の海に沈むところは約百米の急斜面をなす海岸である。

扨て此の背振山を中心とする山地の斜面について考察してみるならば、大體に於てそれは福岡縣側に狭く佐賀縣側に廣き面積を有すると言ふことが出来る。而して佐賀縣側も玄海斜面と有明海斜面の兩方を有するのであるが背振、天山地區に於ては有明海斜面が廣いのである。先づ玄海斜面としては松浦川及び其支流たる嚴木^{キウラギ}

川と、それから玉島川斜面がこれである。有明海斜面には筑後川の右岸に向つて南流する數線の支流（主なるものは四流）と、それから嘉瀬川（其上流を川上川と呼ぶ）等が其主なるものである。たゞ本縣側の有明海斜面の中に、ほんの一部だけ玄海斜面の小地域がある。それは神崎郡東背振村の一部であるが、博多灣に注ぐ那珂川の谷に屬する斜面である。

こゝを流れる諸河川の中、本地區を二分するところの主要谷線としては、やはり玄海に注ぐ玉島川の谷から有明海に注ぐ嘉瀬川上流の川上川の谷線をつなぐ線であらう。この谷によつて二分される本區が即ち、これから詳述せんとするとところの背振地壘と天山々塊である。

（つゞく）